

内供がこう云う消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに云うまでもない。内供はこの方面でもほとんど出来るだけの事をした。

からすうり ^{せん} 瓜 を煎じて飲んで見た事もある。鼠の ^{いばり} 尿 を鼻へなすって見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと唇の上にぶら下げているではないか。

所がある年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上った ^{でし} 弟子の僧が、
^{しるべ} 知己の医者から長い鼻を短くする法を教わって来た。その医者と云うのは、もと ^{しんたん} 震旦 から渡って来た男で、当時は ^{ちょうらくじ} 長楽寺 の ^{ぐそう} 僧になっていたのである。

内供は、いつものように、鼻などは気にかけないと云う風をして、わざとその法もすぐにやって見ようとは云わずにいた。そうして一方では、気軽な口調で、食事の度毎に、弟子の手数をかけるのが、心苦しいと云うような事を云った。内心では勿論弟子の僧が、自分を ^{ときふ} 説伏せて、この法を試みさせるのを待っていたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに対する反感よりは、内供のそう云う策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであろう。

弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めて、この法を試みる事を
勧め出した。そうして、内供自身もまた、その予期通り、結局こ
の熱心な勧告に 聴^{ちょうじゅう} 従^{じゅう} する事になった。

Read by Yumi Boutwell 2-24-08

Text from http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/42_15228.html

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1997（平成9）年4月15日第14刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997年11月4日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫](http://www.aozora.gr.jp/)（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。